



# 怪盗タバン

2009.02.17

怪盗タバンは、暗闇で 目を凝らしました。

深夜の nazuna 館は、ひっそりと 静まり返っています。

いつも ガラスに ペターっと ほっぺを くっつけて 展示品に 見入っている  
かわいい女の子が ひとり、毎日のように 来ているけれど、  
さすがに こんな時間には いません。

怪盗タバンは、薄桃色のマントを さっと翻すと、  
猫のように 足音を立てずに 歩き出しました。

昼間は、純情な女の子のふりをして、  
どこかの かわいい女の子と一緒に ガラスに ペターっとしている タバン。

nazuna 館の展示品には、それほど不思議な輝きが ありました。

この nazuna 館になら、自分の探しているものが あるに違いない。

そう思ったタバンは、怪盗タバンの姿を変え、  
深夜に こっそりと nazuna 館へ しのびこんだのでした。

大きな古城を そのまま ギャラリーとして 使っている nazuna 館は、  
ひとつの部屋に ひとつの作品  
という、とても贅沢な展示のしかたを しています。

冷たい石造りのお城は 静まり返っていました。

タバンは、薄桃色の手袋をはめた手で そっと 扉を開け、  
ひとつひとつの部屋を 見て回りました。

nazuna 館は、とても不思議な場所でした。

ある部屋では、  
タバンは、遠い日々へ 帰ったような感覚に 包まれました。

ある部屋では、  
お母さんのことを 思い出しました。

ある部屋では、  
まったく知らなかった自分に出会いました。

ある部屋では…  
そして また ある部屋では…

ひとつ ひとつ。

部屋に入るごとに、  
タバンは、旧くて 新しい 自分を脱ぎ捨てます。

そして その心許なさを隠すかのように、  
薄桃色のマントを 固く巻きつけて、また 次の部屋へと 移動するのです。

とうとう すべての部屋を 回り終えました。

が、タバンの探していたものは、どこにも ありませんでした。

盗秘術の師匠である 黒いマントの怪盗紳士が  
誰にでも **必ずあるんだよ** と言っていた、あるもの。

それ以来 タバンが ずっと 探し続けてきた、あるもの。

やっぱり、ここにも なかった。  
自分には、それを手に入れる資格が ないのかもしれない。

歩き疲れた タバンは、  
大広間の壁に埋め込んである 古ぼけた縁取りの大きな鏡を  
ぼんやりと 見つめていました。

何百年前から そこにあるのでしょうか？

金属でできた鏡面は、かなり 磨きこまれていましたが、  
なぜか 曇っていて、  
タバンの姿をも また、ぼんやりと 曇ったまま 映っていました。

…は…に……ます。

ふいに、鏡の向こうから、声がしました。

タバンは、その声に従って、そっと 胸に手を当ててみました。

すると、  
ほのかな暖かさが、丸く 丸く 広がりはじめました。

その暖かみと 丸みは、むきだしのまま、  
タバンの胸の中で、ホタルのように ぼおっと 浮かんでいました。

…は すでに … あります。

タバンの胸の奥から、小さな声が 響いてきました。

それと同時に、曇っていた鏡の鏡面が さっと 晴れて、  
暗闇の中に タバンの姿が くっきりと 浮かび上がりました。

鏡に映ったタバンの胸は、  
ハート型の銀色の光に、優しく貫かれていました。

愛は すでに ここに あります。

怪盗タバンは、小さく つぶやくと、  
そっと 鏡に背を向け、大広間から 出ていきました。

薄桃色のマントが nazuna 館の城壁を はらりと 飛び越えた頃、  
大広間では ガラスのシャンデリアが 小さな灯りを ともしていました。

古ぼけた縁取りの 大きな銀の鏡には、  
また 別の姿が 映っています。

愛は すでに ここに あります。

nazuna 館の店主は、歌うように、しかし きっぱりと 宣言すると、  
そっと シャンデリアの灯りを 吹き消して  
鏡の奥深くへ 消えていきました。

魔法の城、nazuna 館へ、ようこそ。